

文

加賀 まゆみ(夢洲生きもの調査グループ)
渡辺 綱男(UCN日本委員会会長)

——2023年11月19日、私たちは大阪自然史フェスティバルにて、「OSAKA ベイエリアにいのち輝く自然を取り戻すために」と題するシンポジウムを開催しました。その簡単な報告をさせていただきます。また、その登壇者のおひとりである渡辺綱男様から原稿をいただきましたので、続けて掲載します。——

シンポジウム「OSAKAベイエリアに いのち輝く自然を取り戻すために」報告

文 加賀 まゆみ(夢洲生きもの調査グループ)
写真 夢洲生きもの調査グループ

2023年秋のシンポジウムのテーマ・登壇者の企画を検討していた折、8月「湿地埋め立てに懸念」という環境NGOバードライフインターナショナル保全ディレクターのリチャード・グリメット氏の談話が共同通信社によって配信された。この内容はまさに私たちが社会に訴えたいメッセージそのものであり、私たちはご本人にぜひ直接語っていただきたいと考え、バードライフインターナショナル東京のご尽力により、ビデオレターをいただくことができた。シンポジウムでは、それを当日上映。その後講師3名でのミニ講演と、行政職員・NPOメンバー2名を加えて、自然史博物館の佐久間学芸員をファシリテーターとしてパネルディスカッションを持った。

まず、グリメット氏から、日本は国際的に重要な渡り鳥ルート＝東アジア・オーストラリア・フライウェイにおける中継地。現在シギ・チドリ類の絶滅のリスクが増大している中、とくに夢洲は重要な中継地。この自然環境はあらゆる手段で守らなければならない、という強いメッセージをいただいた。

次は山西良平氏(大阪市立自然史博物館元館長)による「大阪湾の生きものの再生—大阪湾ウエル

カムリスト」と題する講演では、府県別のレッドリストでは、大阪湾というまとまった海域での生きものの評価がむずかしいことから、長年続けてきた市民調査「大阪湾生きもの一斉調査」のデータをもとに、めったに見つからないもの(ほんまかいな!)、生息地域がごく限定されているもの(よう来たな!)、多数地点で確認され良好な環境の指標になるもの(ずっとおってな!)など、観察会や一般の調査参加者にもわかりやすい基準で「大阪湾ウエルカムリスト」をとりまとめ、国土交通省所管の「大阪湾再生推進会議」へ提出した。現在そのリストが公的に採用されるに至り、今後自然再生へ向けての指標となることが期待される。

2番目の講演は夏原由博当協会会長による「ランドスケープからみた夢洲」で、シギ・チドリの渡来数の変化やどのような環境を好むかなどのデータを紹介。夢洲では埋め立てが進み、湿地面積の減少と共に渡来数が激減。また、日本への渡来数の減少比率に比べ、夢洲・南港野鳥園とも減少が著しく、夢洲の湿地がなくなれば野鳥園への飛来数も減ることがわかる。また、湿地があっても海水の流出入がなけ



写真-1 司会のエミリーさん (当協会会員)



写真-2 パネルディスカッション

左端はファシリテーターの佐久間氏(大阪市立自然史博物館)

れば、生物多様性は失われ、渡来数が減ることは野鳥園の調査から明らか。大阪では自然海岸が僅か1%、淀川流域も砂防ダム・護岸工事などで自然の河原が失われた。野鳥の絶滅を防ぐには流域圏全体で取り組む必要がある。自然のかく乱を活かした自然の維持と、立地条件をいたした自然の再生およびほどほどの手入れが必要である。

3番目の講演、渡辺綱男氏(国際自然保護連合日本委員会会長)からは、「自然共生：世界の動向と夢洲・大阪湾の保全・回復」と題して、日本の自然保護の歩みと、2022年12月の昆明・モンリオール生物多様性枠組を紹介。そこで採択された2030年ターゲット(緊急に取り組むべき行動目標)の中から、生物多様性への脅威の縮小のための「ネイチャーポジティブ」をすすめるため、なかでも、生態系回復・再生計画と、法制度に基づく保護地域指定やOECM(保護地域以外の生物多様性保全に資する地域)の展開などで、国土の総合的な空間計画・管理を考える「ランドスケープ・アプローチ」の提案がなされた。これは、大阪湾や淀川流域という広がり

の中での自然のつながり、生態系のつながり、かかわる人々のつながりを大切にして、取り組みを進めているという考え方である。

次のパネルディスカッションに移る前には、パネラーとして加わるお二人が、自己紹介も兼ねて現在の活動と課題をご紹介いただいた。

先に近畿地方環境事務所(環境省)の八元綾氏より、「ネイチャーポジティブ」達成への取り組みとして、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全する「30by30目標」が紹介された。これに資する民間の取組として、自然共生サイトの登録が呼びかけられており、今年度は2度に分けて募集を行い、前期だけで122箇所が認定されている。

次に寺川裕子氏(NPO共生の森)から、堺港につくられた産業廃棄物による人工埋立地の自然再生に20年前から関わっている体験が紹介された。当初は地区の将来像をデザインし、土地にふさわしい苗木を植樹していたが、一連の植樹が完了し、現在は間伐の段階に入っている。猛禽類や哺乳類も入り込んできて、自然の回復力の強さを

見せつけられる思いがする。陥没したところに水がたまり池ができ、そこに潮波も吹き込むが、天気次第で環境が変化するし、アルカリ性が強く、まだ安定した湿地にはならない。現在はまだ埋め立て後の環境モニタリングを継続中で、一般公開の利用はできないため、当分非公開でボランティア限定の入場となっている。

次に、佐久間大輔学芸員(大阪市立自然史博物館)をファシリテーターとして、会場からの質問メモに対応しながら、パネルディスカッションをした。ここでは、各登壇者が講演で言い切れなかったことをお互い質問・補完しあい、今後の大阪湾全体の自然回復にむけて、行政・各ボランティアグループ・社会のさまざまな人たちが連携し、つながっていく必要が再認識された。

このシンポジウムのアーカイブは、YouTube大阪市立自然史博物館チャンネルで、2024年秋まで、視聴できますので、ぜひごらんください。